

# 課題の重要度がセルフハンディキャッピングに与える影響

○山口華子・増羽梨菜・宮本健太・井川純一  
(大分大学)

## 目的

セルフハンディキャッピング(以下、SHC)は「自己に脅威となる事象が生起する前の帰属的方略」である(沼崎・小口, 1990)。伊藤(1994)はセルフ・ハンディキャップにより、たとえ失敗した場合でも、失敗の自尊心への影響を最小限に止めることができ(割引効果)、また成功した場合には、能力帰属が割り増しされて、自尊心を高揚させることができる(割増効果)と言及している。

本研究では、SHCに影響を与える要因として、課題の重要度、課題遂行前後、自信の有無に着目し、割引効果及び割増効果とSHCとの関係について検討を行った。

**仮説と検討** 本研究では、「課題の重要度が高い場合には、割引効果も割増効果が関係する余地がないため、SHCが低くなる」、「自信の有無とSHCは関連せず、自信がない時は割引効果、自信があるときには割増効果が働く」という2つの仮説を立て、検討を行った。また、課題遂行前後によるSHCの差異に関しては探索的検討を行った。

## 方法

**手続き** 調査期間は2018年10月~11月で、調査参加者がシナリオ場面でどのように行動するかを問う場面想定法実験で行った。「あなたは上記のシナリオであれば、どのようなセルフ・ハンディキャッピングをしますか?」と教示し、調査参加者はシナリオの場面であれば、SHCを行うのかについての質問項目に回答した。

**調査参加者** 大分大学の学生170名(男性88名、女性81名、性別未記入1名 平均年齢19.365歳)。

**質問紙** 調査参加者は、性別、年齢及び個人属性に関する質問票、自尊感情尺度(山本・松井・山成, 1982)、SHC尺度(沼崎・小口, 1990)を用いた質問票に回答した。

**シナリオ** シナリオは、重要度(高・低)、自信(有・無)、前後(前・後)を統制したA~Hの8種類のシナリオを作成し、各シナリオにつき20~22人調査した。

## 結果

**尺度の分析** 自尊感情尺度、SHC尺度のそれぞれについて探索的因子分析を行った結果、自尊感情尺度は、「少なくとも人並みには、価値のある人間である。」などからなる1因子構造( $\alpha=.859$ )、SHC尺度は、「感情に邪魔されなければ、もっとうまくできるのと思う。」などからなる「言い訳因子( $\alpha=.608$ )」、「非常に落ち込んでしまい、簡単なことさえなかなかできなくなってしまうことが時々ある。」などからなる「引きずり因子( $\alpha=.570$ )」の2因子構造が採用された。また、シナリオ場面のSHC尺度は探索的因子分析の結果、“アルバ

イトが忙しい。”などからなる「やれないSHC( $\alpha=.742$ )」、「この科目は勉強しても意味がない。」などからなる「やる気なしSHC( $\alpha=.740$ )」の2因子構造を採用した。

**階層的重回帰分析** シナリオ場面におけるSHC(やれない・やる気なし)を従属変数として、Step1で個人属性、シナリオの条件及びその他の因子得点、Step2でシナリオの交互作用を投入した階層的重回帰分析を行った。やれないSHCにおいては、有意な説明率は認められなかった( $R^2=.097, n. s.$ )一方、やる気なしSHCを従属変数とした分析では、自信の標準偏回帰係数( $\beta=-.139$ )が有意傾向を示した( $R^2=.114$ )。次に、男女別に同様の分析を行った結果、やる気なしSHCでは、女性においてのみ、重要度の標準偏回帰係数( $\beta=-.231$ )が有意となり、重要度と自信との交互作用( $\beta=.265$ )が認められた( $R^2=.312$ )。重要度と自信の交互作用についてFigure1に示す。

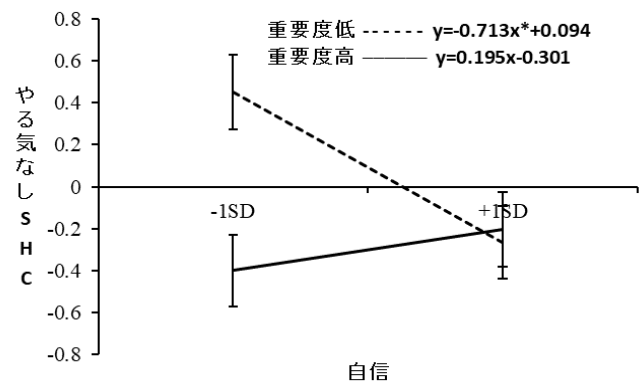


Figure1 女性のやる気なしSHCにおける自信と重要度の影響。

## 考察

本研究の結果から、課題の重要度が高い場合にはSHCは低く、自信の有無とSHCは関連しないことが明らかとなった。また、やる気なしSHCは女性においてのみ、課題の重要度が低い場合で自信の有無による差が認められた。重要度が低く、自信が無い場合は、やる気なしSHCを行う動機は主として割引効果であるという可能性が高い。一方、女性の場合は自尊心維持の観点から、割増効果も同時に働いていた可能性が示唆される。なお、探索的検討を行った課題遂行前後の効果は認められなかった。これについては、シナリオの内容に関して検討の余地がある。

## 引用文献

- 沼崎 誠・小口 孝司(1990)．大学生のセルフ・ハンディキャッピングの2次元，社会心理学研究，5，42-49。  
伊藤 忠弘(1994)．セルフ・ハンディキャッピングの統制可能性・安定性および形態が観察者の印象に及ぼす影響，社会心理学研究，10，24-34。